

手指の腫脹に対する柴苓湯の 治療効果の検討

大田原赤十字病院 整形外科 吉田 祐文

キーワード

- 腫脹
- 柴苓湯
- 近位指節間関節
- 利尿作用

整形外科領域で遭遇する機会が多い「手指の腫脹」の治療には、原疾患の適切な治療が必須であるが、適切な治療が行われたとしても消退に時間を要する場合が多く、日常生活に少なからぬ支障をきたす。また、「手指の腫脹」の客観的な評価方法も確立されていないため、治療の有用性を論じることが困難であった。当科では指輪ゲージを用いた近位指節間関節での通過性により評価している。この方法を用い、「手指の腫脹」に対する柴苓湯の治療効果の検討を試みた。

はじめに

われわれ整形外科医は多彩な疾患・外傷の治療に携わっている。対象とする現症には「創傷治癒」、「骨癒合」、「関節可動域」、「握力」、「筋力」など治療成績が客観的に判断できるものと、「疼痛」、「しびれ」、「つり」、「こり」、「こわばり」など症状の程度の判断が主観的にしか評価できないものがあり、後者に対する評価方法としてはVisual Analogue Scale (VAS)やSF-36などが用いられている。

対象とする現症にはそれ以外に「冷感」、「むくみ」など主観的な側面と客観的な側面を合わせ持つものが存在する。「冷感」、「むくみ」などは第三者の観察（触診、視診）では認められなくても本人が自覚していることは少なくないが、サーモメーターによる計測や周径測定により客観的な評価は可能である。

以上の様々な現症のうち当科で行なわれている「手指の腫脹」に対する治療方法を紹介する。

手指の腫脹

整形外科の診療で「手指の腫脹」を来すのは、大きく分けると外傷と炎症である。手指の外傷（骨折・脱臼・打撲・捻挫・切創など）でも手指の炎症（関節炎・関節リウマチ・蜂窩織炎・化膿性疾患など）でも患指は腫脹するが、手指以外の手・手関節・前腕・肘関節・上腕の外傷あるいは炎症でも手指は腫脹する。また手指、上肢の手術によっても（外傷および炎症の相互の機序によると考えられるが）やはり手指は腫脹する。

手指の腫脹に対する治療には原疾患の適切な治療が必須であるが、適切な治療が行われたとしても消

退に時間を要する場合があります。不快感・疼痛・可動域制限による手指の使いにくさが持続すれば日常生活活動や職場での作業に少なからぬ支障をきたす。

それぞれの病態における手指の腫脹の自然経過は、筆者の知る限りでは解明されていないため、また手指の腫脹を客観的に評価する方法も確立されていないため、何らかの治療を施行した場合に腫脹の経時的変化の評価も治療の有用性も論じることが困難である。

当科では貴金属業界で普及している指輪ゲージ（図1）に着目し、現在は近位指節間関節（PIP関節）での通過性により手指の太さに代用させている。

薬物療法としてまず消炎酵素製剤が考えられるが、経験上は有用性が高いとは考えにくいとの印象を持つ。そこで当科では漢方エキス製剤の柴苓湯に着目した。

図1 指輪ゲージ



リングサイズは1～30号までである。サイズと円周の関係は次の通り。

サイズ	15	16	17	18	19	20	21
円周(mm)	55.5	56.5	57.6	58.6	59.7	60.7	61.8
サイズ	22	23	24	25	26	27	28
円周(mm)	62.8	63.9	64.9	66.0	67.0	68.1	69.1

柴苓湯の手指の腫脹に対する効果

柴苓湯は小柴胡湯と五苓散の合方で、主役の小柴胡湯に利尿剤の五苓散を加味した方剤である¹⁾。目標は「体力中等度で、季肋下部の苦満感および肋骨弓下部に抵抗・圧痛(胸脇苦満)があり、口渴、尿量の減少、浮腫などの認められる場合に用いられる。その他、食欲不振、悪心、嘔吐、下痢、腹痛、頭痛、めまい、微熱などを伴うことがある。腹部は振水音を認めることが多い」である²⁾。

手指の腫脹は末梢循環障害による浮腫、組織の損傷による内出血、炎症により蓄積した壊死組織・変性蛋白・ポリペプチド・ムコイドなどにより発現する³⁾。

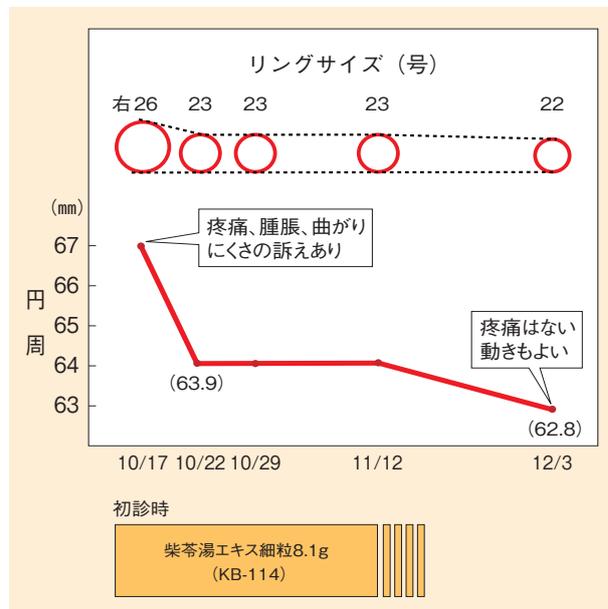
小柴胡湯には柴胡、黄芩が含まれ抗炎症作用がある。この抗炎症作用と五苓散の利尿作用が前述した腫脹の病態の改善に有用であると判断し、当科では柴苓湯を第一選択薬としており、患者のコンプライアンスを考えて1日2回の方剤を使用している。

症例

58歳、女性 右母指基節骨骨折

- X年10月16日 転倒により受傷した。
- 10月17日 初診。疼痛、腫脹、曲がりにくさを訴える。
X線検査で上記診断し、アルフェンスシーネにて固定した。
母指IP関節の周径は指輪ゲージのサイズで、右26(左21)であり、柴苓湯8.1g(分2)を処方。
- 10月22日 右23(左21)で、柴苓湯を継続して処方。
- 10月29日 右23(左20)で、柴苓湯を継続して処方。
- 11月12日 右23(左21)固定をはずす。残薬があり、柴苓湯は処方せず。
- 12月03日 右22(左21)疼痛はなく、動きもよく、終診となった(図2)。

図2 症例の経過



考察

柴苓湯が手指の腫脹の軽減に著効したと思われる1例を供覧した。柴苓湯の適応は、「胃炎、ネフローゼ、その他種々の原因による浮腫、慢性肝炎、肝硬変、水様性下痢、急・慢性胃腸炎、胃腸型感冒。その他、胃アトニー症、胃下垂症、腎盂腎炎、メニエール症候群、暑気あたり」である²⁾。「その他種々の原因による浮腫」を「手指の腫脹」と解釈してよいか検討が必要であるが、経験的には多くの症例で柴苓湯は有用である。いかに有用であるかを明らかにするためには、様々な病態における腫脹の自然経過のデータを蓄積し解析することが必要である。そのためには指輪ゲージによる測定方法の諸問題を解決しなければならない。今後も症例を増やし、検討を重ね、改めて報告する機会を持てるよう精進する所存である。

参考文献

- 1) 漢方常用処方解説(新訂37版) 高山宏世編著 三考塾 p 36-37.
- 2) 和漢診療学 第2版 寺澤捷年 医学書院 p262.
- 3) 今日の治療薬2009 水島裕編集 南江堂 p313.